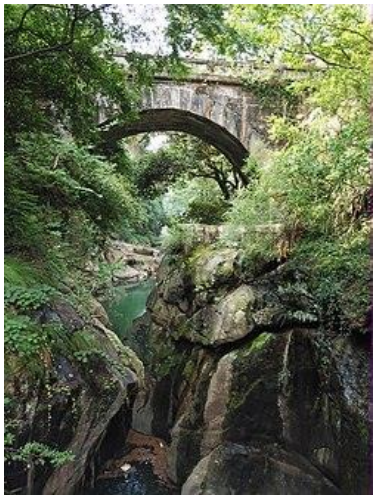
廬山二勝　其二　棲賢三峽橋

棲賢谷の三峽橋の奇景を叙した詩である。

吾聞太山石　吾聞く 太山の石
積日穿綫溜　日を積んで 綫溜に穿たると
況此百雷霆　況んや此の 百雷霆
萬世與石鬪　万世 石と鬪ふをや
深行九地底　深きは 九地の底を行き
險出三峽右　険は 三峽の右に出づ
長輸不盡溪　長く 不尽の溪を輸し
欲滿無底竇　無底の 竇に満たんと欲す
跳波翻潛魚　跳波 潛魚 翻り
震響落飛狖　震響 飛狖を落とす
清寒入山骨　清寒 山骨に入り
草木盡堅瘦　草木 尽く堅瘦
空濛煙靄閒　空濛 煙靄の間
澒洞金石奏　澒洞 金石 奏す
彎彎飛橋出　彎々 飛橋を出づ
瀲瀲半月彀　瀲々 半月彀
玉淵神龍近　玉淵 神竜近く
雨雹亂晴晝　雨雹 晴昼 乱る
垂瓶得清甘　瓶を垂れて清甘を得たり
可嚥不可漱　嚥む可くして 漱ぐ可からず



稱三峽橋 蘇軾曾作《棲賢三峽橋》詩

【通釈】吾は聞いている。太山の石は鋸の如くであると、永い間、綫溜の為に打たるるによる。況やこの瀑布が。百雷霆の落下するご如き勢い。にて、萬世石と鬪うにおいておや。その深きは九地の底まで行き、その険しさは蜀の三峽の右に出づると称されて居る。長く不盡の溪を。運輸して、以て無底の竇孔にたさんとする。跳波は潛む所の魚も翻上し、震響には飛狖も落下する、四辺の清寒は山骨まで逼入して、草木は、ことごとく堅瘦の状態である。而して空濛たる煙靄の間にあって、澒洞は金石奏する美音も聞く。彎彎と曲がる飛橋も出で瀲瀲たる半月彀の如き形である。玉淵潭は神龍近うして雨雹は盛んに晴晝を乱す。瓶を垂れ、清甘を得るもただ是れこれ飲むことはできる、口をすすぐことはできない。

【語釈】○太山石…「漢書 枚乗伝」に「泰山の霤は石を穿ち、単極の航は幹を断つ」という一文があり、それが「雨垂れ石を穿つ」の由来と言われている。○**綫溜**…糸すじのようなしたたり。○**九地底**…王梅谿「不可勝者、守也。可勝者、攻也。守則不足、攻則有餘。善守者、藏於九地之下、善攻者、動於九天之上、故能自保而全勝也」、奥深い土地。極めて低いところ。九天の対。○**三峽**…杜甫、醉歌行「詞源倒流三峽水」、蜀中の三峽。○**長輸**…韓退之「高浪驚天輸盡」。○**無底**…列子湯問篇「渤海之東、不知幾億萬里、有大壑焉。實推無底之谷」。○**竇**…穴。○**飛狖**…狖は黒色の猿。○**山骨**…むき出しになっている山の岩石。○**澒洞**…相連なるさま、混沌としたさま、水が湧き出るさま、虹洞、鴻洞。○**彎彎**…弓なりに曲がるさま。○**瀲瀲**…さざ波、水のあふれる貌。○**半月彀**…弓張月。○**玉淵**…玉淵潭、山峽橋上流にある。○**雨雹**…ひょうをふらせる。○**不可漱**…當云欲枕石漱流、誤云漱石枕流、負け惜しみが強く、自分の誤りに、へ理屈をつけていいのがれることのたとえ、晋の孫楚が「石に枕し流れに漱ぐ」を「石に漱ぎ流れに枕す」と言い誤ったのを、「石に漱ぐ」は歯を磨くため、「流れに枕す」は耳を洗うためだとこじつけ弁解したという「晋書―孫楚伝」の故事によることば。

国会図書館 国訳漢文大成より抄出